

自閉スペクトラム症の青年を育てる親の養育スキル尺度の作成¹⁾

温泉美雪*

Development of a Parenting Skills Questionnaire for Parents of Adolescents with Autism Spectrum Disorder

Miyuki ONSEN*

The purpose of this study was to develop a Parenting Skills Questionnaire for parents of adolescents with autism spectrum disorder (PSQ-A), and to examine its reliability and validity. 116 mothers of junior high and high school students with autism spectrum disorder completed questionnaire. A factor analysis revealed that PSQ-A had a 2-factor structure; “children’s behavior promotion skills” and “response skills”. PSQ-A had a sufficiently degree of internal consistency. Additionally, validity of PSQ-A was confirmed to some extents. Scores of “children’s behavior promotion skills” and “response skills” were correlated positively with total and subscale scores of positive parenting behaviors on Positive and Negative Parenting Scale (PNPS). However total and subscale scores of negative parenting behaviors on PNPS were negatively correlated only with scores of “response skills”. The applicability of PSQ-A for parents of adolescents with autism spectrum disorder, limitations of this study, and directions of future research were discussed.

key words: parenting skills, parent training, autism spectrum disorder, adolescence

問題と目的

自閉スペクトラム症には社会コミュニケーションと対人相互反応に持続的な障害があり、興味の限局や反復行動あるいは感覚の特異性が見られる (American Psychiatric Association, 2013)。また、自閉スペクトラム症はコミュニケーションスキルや社会的スキルの獲得が難しく、養育には困難を伴いや

すい。そうした子どもたちに対して行動理論に基づいた養育スキルを親が学ぶペアレント・トレーニングは養育支援として非常に有効である (Brookman-Frazee, Stahmer, Baker-Ericzen, & Tsai, 2006)。

しかし、ペアレント・トレーニングには、自閉スペクトラム症の支援ニーズに対応できていない課題がある。第一の課題は、我が国における知的障害のない自閉スペクトラム症に対応するプログラムの不足で

¹⁾ 本研究の執筆に際し、小野寺敦子先生 (目白大学)、元井沙織先生 (エゴレジ研究所)、千田若葉先生 (ながやまメンタルクリニック)、筒井順子先生 (田園調布学園大学)、中村葉々子先生 (中央大学) からご助言をいただきました。また、調査を実施するに当たり、多くの教育機関や相談機関の方から多大なるご協力をいただきました。本研究にお力添えいただいた全ての方に、心より感謝申し上げます。

* 田園調布学園大学人間福祉学部

Faculty of Human Welfare, Den-en Chofu University, 3-4-1 Higashi Yurigaoka, Asao-ku, Kawasaki-shi, Kanagawa 215-8542, Japan.

ある。自閉スペクトラム症に対するペアレント・トレーニングは、欧米では知的障害の有無に限らず個別に行われることが多い (Brookman-Frazee, et al., 2006)。ところが我が国では、知的障害を伴わない自閉スペクトラム症の子どもは、注意欠如多動症あるいはその傾向のある子どもを対象とした集団プログラムに参加している (原口・上野・丹治・野呂, 2013)。そして、注意欠如多動症と自閉スペクトラム症を併存している場合には注意欠如多動症のみの場合よりも、子どもの行動や親の精神的健康に改善が認められないという報告がある (富澤・佐藤・横山, 2013)。集団プログラムが知的障害のない自閉スペクトラム症に充分対応できない要因として、個別プログラムと異なり専門家が直接子どもに対応しないことや (原口他, 2013)、自閉スペクトラム症に見られる刺激の過剰選択性 (Lovaas, Koegel, & Schreibman, 1979) が考えられる。つまり、自閉スペクトラム症の場合には、子どもの行動のきっかけとなる先行刺激や、望ましい行動を維持させる強化随伴性を親が正確に認識しにくく、そのために、親が子どもの特性に合わせて適切に対応できないことが推察される。そこで、求められるのは、先行刺激や強化随伴性を観察しながら、環境調整や消去などの手続きを子どもの行動の機能に合わせて適用する個別性の高いプログラムである (井上, 2012)。その一方で、集団プログラムは親同士の仲間づくりの場になること (井上, 2012)、さらに個別プログラムは経済的なコストが高いことから (Lundahl, Risser, & Lovejoy, 2006)、集団プログラムが地域に普及していると考えられる。そこで、集団で行われるプログラムの自閉スペクトラム症への適用に際して、行動の機能について子どもの個性を考慮できるように、専門家は親を支援する必要がある。

第二の課題は、知的障害を伴わない自閉スペクトラム症のある青年の親に対応できるプログラムの不足である。自閉スペクトラム症の青年の親がペアレント・トレーニングに参加したという報告 (Matsuo, Inoue, & Maegaki, 2015) は限られている。その一方で、自閉スペクトラム症の子どもは年齢が高くなるにつれて不安や抑うつが高じることが多い (Mayes, Calhoun, Murray, & Zahid, 2011)。また、要求性と応答性の高い養育は自閉スペクトラム症の不安や抑うつなどの内在化行動問題を抑制することが明らかに

なっている (Williams, Degnan, Perez-Edgar, Henderson, Rubin, Pine, Steinberg, & Fox, 2009)。このように、養育と自閉スペクトラム症の行動問題には関連が見られることから、ペアレント・トレーニングによって親の養育を変容させることを介して、自閉スペクトラム症の青年の行動問題は軽減されることが期待される。さらに、自閉スペクトラム症の青年と親には親子間葛藤が高まることから (井上, 2015)、親同士のピアカウンセリングの効果が示唆されている集団ペアレント・トレーニングは (井上, 2012)、親の精神的健康の促進に寄与すると考えられる。

ペアレント・トレーニングの第三の課題は、親の養育スキルを評価する尺度の不足である。ペアレント・トレーニングが自閉スペクトラム症の子どもの行動や親の精神的健康に及ぼす影響に関する研究は多いにも関わらず、養育スキルに及ぼす影響に焦点を当てた研究は少ない (Grindle, Kovshoff, Hastings, & Remington, 2009)。我が国で行われている集団プログラムの効果を検証する際には、子どもの行動や親の精神的健康を対象にすることが多く、親の養育スキルの評価は個別プログラムで行動観察を通じ行われるものが多い (原口他, 2013)。集団プログラムに参加した親の養育スキルの評価として、Knowledge of Behavioral Principles as Applied to Children (KBPAC; O'Dell, Tarler-Benlolo, & Flynn, 1979) を用いた行動理論に関する基礎的な知識を測定した研究は認められるが (原口他, 2013; 吉田・野中・堀川・加藤・嶋田, 2019)、KBPAC は行動理論に精通していなければ問題の意図を読みとりにくく、養育スキルを適切に測定しているとは言いがたい。この他に、定型発達の幼児から青年の親を対象とした養育行動尺度に肯定的・否定的養育行動尺度 (Positive and Negative Parenting Scale; 伊藤・中島・望月・高柳・田中・松本・大嶽・原田・野田・辻井, 2014) がある。Positive and Negative Parenting Scale (PNPS) は養育の実態を包括的に測定する尺度として開発されたものであり、子どもの行動を変容したり親子関係を補強するというペアレント・トレーニングの意図を含むものではない。以上から、ペアレント・トレーニングが親の養育スキルに及ぼす影響を評価する養育スキル尺度の作成は急務である。

そこで本研究では、知的障害のない自閉スペクト

Table 1 肥前方式と精研・奈良方式の特徴

| | |
|----------------|--|
| <u>肥前方式</u> | 子どもの行動変容に主眼を置いている。環境を整え、子どもの行動を変容させ、その行動を強化することを重視する。 |
| <u>精研・奈良方式</u> | 親子関係の補強に主眼を置いている。子どもの望ましい行動に肯定的な注目を与え、望ましくない行動には注目を与えない。 |

ラム症の青年の親を対象としたペアレント・トレーニングの開発に先駆けて、行動理論に基づく養育スキルを測定する尺度の開発を目的とする。ペアレント・トレーニングには子どもの行動変容に主眼を置くものと、親子関係の補強に主眼を置くものがある (Shaefer & Briemeister, 1989)。我が国の知的障害のない発達障害を対象としたプログラムとして、前者に肥前方式が (會田・磯村・伊藤・大隈・岡村・温泉・野中・免田・山田, 2005)、後者には精研・奈良方式がある (上林・中田・藤井・井潤・北, 2002; 上林・北・河内・藤井, 2009; 岩坂・清水・飯田・川端・近池・大西・岸本, 2002)。肥前方式は自閉スペクトラム症を含む知的障害のある子どものプログラム (免田・伊藤・大隈・中野・陣内・温泉・福田・山上, 1995; 伊藤・大隈・温泉・神内・福田・免田・山上, 1998) を注意欠如多動症向けに、精研・奈良方式は注意欠如多動症の子どもの対象としたカリフォルニア大学のプログラム (Barkley, 1987) を参考に開発されたものである。

Table 1 に示す通り、肥前方式は子どもの行動変容に、精研・奈良方式は親子の関係補強に主眼を置いている。肥前方式では親子関係が好転することが (伊藤他, 1998)、精研・奈良方式では子どもの行動が適応的に変化することが明らかになっている (岩坂他, 2002)。そこで、本研究で作成する養育スキル尺度は、子どもの行動変容を指向するスキルと、親子関係を補強させるスキルから構成されるものと考え、それぞれのアプローチを代表する肥前方式と精研・奈良方式から項目を作成する。

なお、本研究では、養育スキル尺度について調査による回答を得やすい母親を対象とする。また、子どもの年齢は、内在化行動問題が顕在化しやすくなる青年期前期とする。

方 法

実施方法・参加者・倫理的配慮

2019年7月～2020年2月に、特別支援教育を行っている公立や私立の中学校・高等学校・通信制高等学校、発達に関する相談機関 (医療機関・大学の相談部門・社会福祉法人など) に調査を依頼した。

調査実施に際しては、調査への協力を承諾した各機関に質問紙を郵送した。質問紙は、学校では保護者会などのために来校した生徒の保護者に、相談機関では縁故法により自閉スペクトラム症の中高生の母親に配布した。なお、学校を介して保護者から得られた回答については、回答者が母親で、子どもが自閉スペクトラム症の診断を受けているものを抽出し調査対象とした。質問紙には返信用の封筒を同封し、回答を調査者の勤務先に返信するよう求めた。高等学校の1校は、初めにwebによる調査を1ヶ月行い、調査を終了した。そして、改めて全生徒数分の質問紙を配布し、webで回答していない保護者に質問紙による調査を求めた^{注1)}。回収率は配布した質問紙の総数を分母とし、質問紙あるいはwebによる回答の総数を分子として算出した。

倫理的配慮として、質問紙上あるいはweb調査の画面上で保護者に調査の目的、自由意思による無記名回答であること、およびデータの管理と解析後の処理や調査結果の公開方法について文章で説明し、同意を得たうえで回答を求めた。また、本研究の実施については、筆者が所属する大学の研究倫理委員会の審査と承認を受けた (承認番号: 19-003 (A))。

尺度作成

養育スキル尺度の項目は、肥前方式 (免田他, 1995; 伊藤他, 1998; 會田他, 2005) と精研・奈良方式 (上林他, 2002; 上林他, 2009; 岩坂他, 2002; 井潤, 2018) を参考にして、10年以上ペアレント・トレーニングを行っている公認心理師1名、発達心理

Table 2 養育スキル尺度の草案と各項目のスキルおよび行動理論上のカテゴリー

| 項目 No. | スキル (肥前方式) | スキル (精研・奈良方式) |
|--|-----------------|--|
| 13. 子どもにとって、今、特に大切だと思う目標を決めている | 目標行動の特定 | 増やしたい行動の特定・よりよい行動のためのチャート (以下, BBC) |
| 17. 子どもにして欲しいことを具体的に伝えている | 具体的で明確な指示 | 効果的な指示 |
| 11. 子どもに話すときは、分かりやすい言葉を選んでいる | 具体的で明確な指示 | 効果的な指示 |
| 3. 身の回りのことを自分でできるように、物の置き場を決めている | 環境調整 | |
| 9. 大事なことを子どもが忘れないように、メモ書きを見えるところに貼っている | 環境調整 | BBC |
| 19. 子どもが一人でできるように、工夫している | 具体的で明確な指示・環境調整 | BBC |
| 1. 話しかけるときは、子どものそばに行く | 子どもの注目に即した指示 | Calm Close Quiet の指示 (以下, CCQ) : Close |
| 【行動理論における「先行刺激」の工夫】 | | |
| 12. 子どもが話しかけてきたら、手をとめて話を聞く | 肯定的な注目 | 肯定的な注目 |
| 2. 子どもが機嫌をそこねたときは、子どもが落ち着くまで待つ | 不適切行動への強化非随伴 | 注目を外す |
| 8. 子どもが慌てているときでも、冷静にふるまうようにしている | 不適応行動への強化非随伴 | 注目を外す |
| 14. 子どもを叱るときは、一呼吸して気持ちを整える | 不適切行動への強化非随伴 | 注目を外す・CCQ : Calm |
| 10. 子どもが努力していることをほめている | 正の強化 | 肯定的な注目 |
| 7. 子どもの出した成果に関心を持って接している | 正の強化 | 肯定的な注目 |
| 【行動理論における「強化随伴」の工夫】 | | |
| 16. 子どもに何かさせるとき、その時点でどこまでできているか確認する | 行動を細かくステップに分ける | 大きな仕事を小さな作業に分解する・BBC |
| 【行動理論における「課題分析】 | | |
| 20. 話したことを子どもが理解したか、確認している | 観察 | BBC |
| 5. 叱った後には、言いたかったことが伝わったか確かめている | 観察 | BBC |
| 18. 自分の態度が子どもにどのように映っているか、気にかけている | 観察 | BBC |
| 15. 子どものやる気をそぐような言動がなかったか、気にかけている | 観察 | BBC |
| 【行動理論における「行動分析】 | | |
| 6. うまくできないことがあったときは、今後のことを子どもと一緒に考える | 目標行動・指示・環境調整の検討 | 増やしたい行動や効果的な指示の検討 |
| 4. 困ったときに、手助けを求める方法を教えている | 代替行動の形成 | 効果的な指示 |

注：表中の項目 No. は調査用紙の項目 No. に対応している

学を専門とする大学教員1名、認知行動療法を専門とする公認心理師1名および大学教員1名が項目を作成した。なお、各項目の表現が具体的に理解できるものであるかについて、高校生を育てる母親から確認を得た。Table 2に養育スキル尺度の草案を示す。

Table 2には養育スキル尺度の各項目について、前述の肥前方式と精研・奈良方式のプログラムに基づきスキル名を表記した。また、各スキルを行動理論のカテゴリーにまとめ、これを示した。全項目は20項目で、子どもに促す行動の特定、先行刺激の工夫、

強化に伴う工夫、課題分析、行動分析、代替行動の形成に関するスキルから構成された。

調査内容

子どもの診断名 診断名について回答を求めたうちの、自閉症、高機能自閉症、自閉症スペクトラム障害、アスペルガー障害、アスペルガー症候群、広汎性発達障害は全て自閉スペクトラム症に分類した。

養育スキル尺度 作成した尺度の各項目について、「いつもしている」を4点、「時々している」を3点、「あまりしていない」を2点、「まったくしていない」を1点とし、現在の養育スキルについて尋ねた。

肯定的・否定的養育行動尺度 (PNPS) 本研究ではPNPS(伊藤他, 2014)を外的基準として、養育スキル尺度の収束的妥当性を検討した。PNPSは養育のあり方を包括的に捉えることのできる尺度である。また、PNPS開発チーム(2018)によると、PNPSには十分な信頼性と妥当性があり、就学前の子どもから高校生を対象として標準化されている。さらに簡便で実用的であり、発達障害のある子どもの親支援の効果判定に用いられている。PNPSの因子構造は、肯定的養育と否定的養育という上位2因子からなる。肯定的養育の下位尺度に、関与・見守り、肯定的応答性、意思の尊重の3因子が、否定的養育の下位因子に、過干渉、非一貫性、厳しい叱責・体罰の3因子がある。肯定的養育および否定的養育は、それぞれ3つの下位因子の合計得点を算出したものである。自閉スペクトラム特性の高い子どもの親は、定型発達とみなされる子どもの親より、肯定的養育やその下位因子の得点は低く、否定的養育やその下位因子の得点の高いことが明らかになっている。本研究の調査対象者には、PNPSについて本尺度の教示に従い、「非常によくある」を4点、「よくある」を3点、「ときどきある」を2点、「ない・ほとんどない」を1点とし、現在の養育行動について尋ねた^{注2)}。

仮説

本研究で作成する養育スキル尺度は子どもの行動変容や親子関係の補強に関する項目から構成されているため、行動変容と親子関係の補強に関する2因子から構成されることが考えられた。また、養育スキル尺度の得点は、子どもの適応的な行動や親子関係の補強の促進と関連すると考えられるため、PNPSの肯定的養育とその下位因子に正の、否定的養育と

その下位因子に負の相関が見られることが想定された。

分析方法

養育スキル尺度の因子構造を検証するために、探索的因子分析を行った。また、抽出された因子についてCronbachの α 係数を求め、内的整合性を確認した。次に、養育スキル尺度の収束的妥当性を検討するために、抽出された因子得点とPNPSの各因子得点間の相関係数を算出した。これらの分析にはSPSS Statistics25を使用した。

結 果

分析対象者

調査依頼に対し、166名の保護者から質問紙の返信が、20名の保護者からwebを通じた返信があり、合計186名から回答を得た。配布した質問紙の数は527であり、回収率は35.3%であった。得られた回答のうち、自閉スペクトラム症と診断された中高生の母親からの回答数は116であり、これを分析の対象とした。分析対象者の子どもの平均年齢は15.6($SD=1.7$)歳、中学生34名、高校生82名、男子91名、女子22名、性別不明3名であった。母親の平均年齢は48.0($SD=4.8$)歳であった。

天井効果が認められた項目

養育スキル尺度の草案20項目のうち5項目に天井効果が認められた。その項目は、項目11「子どもに話すときは、分かりやすい言葉を選んでいる」、項目2「子どもが機嫌をそこねたときは、子どもが落ち着くまで待つ」、項目8「子どもが慌てているときでも、冷静にふるまうようにしている」、項目10「子どもが努力していることをほめている」、項目7「子どもの出した成果に関心を持って接している」であった。調査対象者は子どもの障害告知を受けており、教育や医療機関から支援を受けているため、これらの養育を行っている頻度が高いと考えられた。そこで、これらの項目は外さずに分析の対象とした。

養育スキル尺度の因子構造

養育スキル尺度の草案である20項目を対象として、因子数を仮定せず、最尤法による探索的因子分析を行った。次に、初期解における固有値の減衰状況(6.176, 2.351, 1.296, 1.130...)から2因子を仮定し、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。この分析の結果示された、因子負荷量が.35以下

Table 3 養育スキル尺度の因子分析結果（最尤法・Promax 回転）および各項目の平均値と標準偏差

| No. | F1 | F2 | 共通性 | M | SD |
|--|------------|------------|-----|------|------|
| F1. 子どもの行動促進スキル ($\alpha=.86$) | | | | 3.20 | 0.45 |
| 5. 叱った後は、言いたかったことが伝わったか確かめている | .78 | -.03 | .59 | 3.03 | 0.78 |
| 20. 話したことを子どもが理解したか、確認している | .76 | -.04 | .56 | 3.06 | 0.73 |
| 6. うまくできないことがあったときは、今後のことを子どもと一緒に考える | .69 | -.14 | .42 | 3.21 | 0.70 |
| 16. 子どもに何かさせるとき、その時点でどこまでできているか確認する | .67 | .04 | .46 | 3.08 | 0.77 |
| 17. 子どもにして欲しいことを具体的に伝えている | .63 | .01 | .40 | 3.38 | 0.60 |
| 19. 子どもが一人でできるように、工夫している | .61 | .03 | .39 | 3.13 | 0.63 |
| 4. 困ったときに、手助けを求める方法を教えている | .57 | -.09 | .29 | 3.25 | 0.71 |
| 10. 子どもが努力していることをほめている | .53 | .11 | .34 | 3.61 | 0.52 |
| 13. 子どもにとって、今、特に大切だと思う目標を決めている | .50 | .13 | .31 | 2.97 | 0.80 |
| 7. 子どもの出した成果に関心を持って接している | .44 | .17 | .29 | 3.67 | 0.54 |
| 9. 大事なことを子どもが忘れないように、メモ書きを見えるところに貼っている | .36 | -.00 | .13 | 2.72 | 0.88 |
| F2. 応答スキル ($\alpha=.79$) | | | | 3.04 | 0.49 |
| 14. 子どもを叱るときは、一呼吸して気持ちを整える | -.20 | .95 | .79 | 2.79 | 0.78 |
| 12. 子どもが話しかけてきたら、手をとめて話を聞く | -.07 | .59 | .32 | 2.80 | 0.69 |
| 8. 子どもが慌てているときでも、冷静にふるまうようにしている | .07 | .58 | .37 | 3.29 | 0.72 |
| 15. 子どものやる気をそぐような言動がなかったか、気にかけている | .20 | .55 | .44 | 3.22 | 0.66 |
| 2. 子どもが機嫌をそこねたときは、子どもが落ち着くまで待つ | .01 | .50 | .25 | 3.34 | 0.70 |
| 1. 話しかけるときは、子どものそばに行く | .03 | .43 | .20 | 2.88 | 0.89 |
| 18. 自分の態度が子どもにどのように映っているか、気にかけている | .31 | .37 | .33 | 2.94 | 0.75 |
| 因子間相関 | F1 | — | .42 | | |

注：表中の No. は Table 2 の項目 No. に対応している

Table 4 養育スキル尺度と肯定的・否定的養育行動尺度の相関係数

| | 肯定的・否定的養育行動尺度 | | | | | | | |
|----------------|---------------|--------|--------|--------|-------|---------|----------|---------|
| | 関与・見守り | 肯定的応答性 | 意思の尊重 | 肯定的養育 | 過干渉 | 非一貫性 | 厳しい叱責・体罰 | 否定的養育 |
| 養育スキル尺度 | | | | | | | | |
| F1 子どもの行動促進スキル | .35*** | .54*** | .24** | .54*** | -.01 | -.05 | .06 | -.02 |
| F2 応答スキル | .24** | .33*** | .36*** | .44*** | -.20* | -.33*** | -.29** | -.34*** |

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

の項目3「身の回りのことを自分でできるように、物の置き場を決めている」と、2因子間の因子負荷量の差が小さい項目11「子どもに話すときは、分かりやすい言葉を選んでいる」を除外し、残りの項目に対して同様に因子分析を行った。その結果、解釈可能な2因子が見いだされた。第1因子は、項目5「叱った後は、言いたかったことが伝わったか確かめている」、項目20「話したことを子どもが理解したか、確認している」などの11項目から、第2因子は、項目14「子どもを叱るときは、一呼吸して気持ちを整える」、項目12「子どもが話しかけてきたら、手をとめて話を聞く」などの7項目から構成された (Table 3)。各因子は、その項目内容から、第1因子を「子どもの行動促進スキル」、第2因子を「応答スキル」と命名した。それぞれのCronbachの α 係数は、第1因子が $\alpha=.86$ 、第2因子が $\alpha=.79$ であった。第1因子と第2因子の因子間相関は $r=.42$ であった。

養育スキル尺度とPNPSの相関

養育スキル尺度とPNPSの因子間相関をTable 4に示す。養育スキル尺度の第1因子である「子どもの行動促進スキル」得点は、PNPSの関与・見守り、肯定的応答性、意思の尊重、肯定的養育に有意な正の相

養育スキル尺度とPNPSの相関

養育スキル尺度とPNPSの因子間相関をTable 4に示す。養育スキル尺度の第1因子である「子どもの行動促進スキル」得点は、PNPSの関与・見守り、肯定的応答性、意思の尊重、肯定的養育に有意な正の相

関が認められた（それぞれ順に、 $r=.35, p<.001$ ； $r=.54, p<.001$ ； $r=.24, p<.01$ ； $r=.54, p<.001$ ）。また、「子どもの行動促進スキル」得点はPNPSの過干渉、非一貫性、厳しい叱責・体罰、否定的養育と無相関であった。そして、第2因子である「応答スキル」得点は、PNPSの関与・見守り、肯定的応答性、意思の尊重、肯定的養育との間に有意な正の相関が（それぞれ順に、 $r=.24, p<.01$ ； $r=.33, p<.001$ ； $r=.36, p<.001$ ； $r=.44, p<.001$ ）、過干渉、非一貫性、厳しい叱責・体罰、否定的養育との間に有意な負の相関が認められた（それぞれ順に、 $r=-.20, p<.05$ ； $r=-.33, p<.001$ ； $r=-.29, p<.01$ ； $r=-.34, p<.001$ ）。

考 察

本研究の目的は、自閉スペクトラム症のある中高生の母親を対象とした養育スキル尺度を作成することであった。そして、本尺度の信頼性についてCronbachの α 係数の算出を、妥当性については収束的妥当性の観点からPNPSとの相関分析を行うことにより検討を行った。

まず、養育スキル尺度の因子構造を検証するために探索的因子分析を行ったところ、仮説通り2因子構造が認められた。11項目からなる第1因子は「子どもの行動促進スキル」、7項目からなる第2因子は「応答スキル」と命名された。各因子のCronbachの α 係数は、「子どもの行動促進スキル」が $\alpha=.86$ 、「応答スキル」が $\alpha=.79$ であり、十分な数値が示されたことから、内的整合性の観点から本尺度の信頼性が認められた。

次に、養育スキル尺度の収束的妥当性を検証するために、「子どもの行動促進スキル」得点と「応答スキル」得点それぞれについて、PNPSの各因子得点との相関分析を行った。その結果、「応答スキル」得点にはPNPSの肯定的養育とその下位因子に有意な正の、否定的養育とその下位因子に有意な負の相関が認められた。また、「子どもの行動促進スキル」得点はPNPSの肯定的養育とその下位因子に有意な正の相関が見られた。これらの結果は、「子どもの行動促進スキル」や「応答スキル」の得点と関連する養育行動の特徴に対応しており、養育スキル尺度の妥当性を支持するものであった。しかし、「子どもの行動促進スキル」はPNPSの否定的養育とその下位因子との間に関連性が見られなかった。この結果は、以

下に述べる二つの観点から考察することができる。

第一に、「子どもの行動促進スキル」は、時として子どもからの反発を招く可能性があり、それがPNPSの否定的養育との相関関係に影響を与えたと考えられる。Dieleman, Pauw, Soenens, Mabbe, Campbell, & Prinzie (2018)によると、過度なしつけや心理的な統制は、自閉スペクトラム症の青年の攻撃的行動やルール違反に正の関係がある。また、子どもの外在化行動は養育に関する親のフラストレーションを介して統制的な養育に正の影響を及ぼすことも明らかになっており、親子関係に否定的な連鎖が起きていることが示唆される。そこで、「子どもの行動促進スキル」得点の高さには過度なしつけや心理的統制が反映され、否定的養育に負の相関を示さなかったと考えられる。第二に、「子どもの行動促進スキル」と「応答スキル」には弱い相関が見られることから、「子どもの行動促進スキル」得点の高い親は、一定の割合で「応答スキル」得点も高いことが示唆される。つまり、「子どもの行動促進スキル」得点の高さは、しつけや心理的な統制が過度な場合と、子どもの状態に合わせて親が行動を促している場合が反映されており、「子どもの行動促進スキル」得点はPNPSの否定的養育とその下位因子との間に相関関係が示されなかったと推察される。

養育スキル尺度の特徴

本研究で作成した養育尺度は、自閉スペクトラム症の青年を育てる親に対するペアレント・トレーニングの効果を測定することを目的に開発された。ペアレント・トレーニングは子どもの行動変容と親子関係の補強という2つの側面があるため、「子どもの行動促進スキル」と「応答スキル」から構成される本尺度はトレーニングの効果を測定するのに適していると考えられる。本尺度には信頼性が認められたが、妥当性が十分に認められたのは「応答スキル」に限られていた。つまり、本研究で作成した養育スキル尺度の「子どもの行動促進スキル」得点の高さのみでペアレント・トレーニングの意図している養育スキルを測定することには限界が認められた。ペアレント・トレーニングにおいて、親が子どもの状態に応じて子どもの行動を促しているかについては、トレーニングの実施者が親と共にモニタリングする必要がある。

青年期には家庭内ルールの取り決めを親主導から

親子で調整していくといった対応の変化が求められる(免田・藤原, 2017)。また, 自閉スペクトラム症の青年のなかには, 受身的に支援を得て自発的な行動が抑制されている状態や, 親に言われたことをやらされている印象を持つ場合がある(松本, 2015)。このような青年の実態を踏まえると, 本尺度の「応答スキル」には, 子どもの行動のモニタリングと, 子どもに促す行動の調整という, 青年期に必要な養育スキルが反映されていると考えられる。そして, 「子どもの行動促進スキル」は, 「自分の態度が子どもにどのように映っているか, 気にかけている」(項目18)などから構成される「応答スキル」が伴われている場合に, 子どもの主体的で適応的な行動を促進する可能性がある。今後は, 本研究で確認された「子どもの行動促進スキル」と「応答スキル」によって養育を捉えることで, 養育と自閉スペクトラム症の行動問題の関係を検討することが期待できる。

本研究の限界と課題

最後に, 本研究の限界と今後の課題について言及する。本研究では, 調査の回収率が35.3%と低く, 得られた結果は調査に協力した一部の母親による限定的なものであった。自閉スペクトラム症の特性は定型発達まで連続体状に分布することから, 一般群を対象にこれを測定する尺度が開発されている(Kamio, Inada, Moriwaki, Kuroda, Koyama, Tsujii, Kawakubo, Kuwabara, Tsuchiya, Uno, & Constantino, 2012)。そこで今後は, 子どもが自閉スペクトラム症の診断を受けているかを尋ねずにその特性の程度について回答を求めることで, 未診断を含めて, 自閉スペクトラム特性の高い青年を育てる親の養育スキルの特徴を検討できると考えられる。また, 父親を対象として養育スキルを調査することによって, 自閉スペクトラム症の青年に対する養育の実態がより明確になるだろう。さらに, 再検査法による信頼性の検討も今後の課題の一つである。

注1) 高等学校の1校にはwebによる調査を実施したが, 1ヶ月経過する時点で回収数が20(全生徒数の約4%)にとどまった。このためweb調査を縮切り, 改めて質問紙を配布して, webで回答していない保護者に回答を求めた。

注2) PNPSは出版元の金子書房に許可を得て自作質問紙やweb調査媒体を作成し, 使用料を支払ったうえで実施した。

引用文献

- 會田千重・磯村香代子・伊藤啓介・大隈絃子・岡村俊彦・温泉美雪・野中美穂・免田賢・山田正三(2005). 大隈絃子・伊藤啓介(監修) 肥前方式親訓練プログラム—AD/HDをもつ子どものお母さんの学習室 二瓶社.
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. (5th ed.) DSM-5. Washington, DC: American Psychiatric Association, pp. 26-29.
- Barkley, R. A. (1987). *A defiant children: A clinician's manual for parent training*. New York: The Guilford Press.
- Brookman-Frazee, L., Stahmer, A., Baker-Ericzen, M. J., & Tsai, K. (2006). Parenting interventions for children with autism spectrum and disruptive behavior disorders: Opportunities for cross-fertilization. *Clical Child and Family Psychology Review*, **9**, 181-200.
- Dieleman, L. M., De Pauw, S. S. W., Soenens, B., Mabbe, E., Campbell, R., & Prinzie, P. (2018). Relations between problem behaviors, perceived symptom severity and parenting in adolescents and emerging adults with ASD: The mediating role of parental psychological need frustration. *Research in Developmental Disabilities*, **73**, 21-30.
- Grindle, C., Kovshoff, H., Hastings, R. P., & Remington, B. (2009). Parents' experiences of home-based applied behavior analysis programs for young people with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **39**, 42-56.
- 原口英之・上野茜・丹治敬之・野呂文行(2013). 我が国における発達障害のある子どもの親に対するペアレントトレーニングの現状と課題—効果評価の観点から— 応用行動分析学研究, **27**, 104-127.
- 井上雅彦(2012). 自閉症スペクトラム(ASD)へのペアレントトレーニング(PT) 本城秀次・野邑健二(編) 発達障害医学の進歩24 発達障害児の家族支援 診断と治療社 pp.30-36.
- 井上雅彦(2015). 発達障害へのアプローチ—最新の知見から—発達障害と家族支援 精神療法, **41**, 577-584.
- 井濶知美(2018). 困っている子の育ちを支えるヒント—発達の多様性を知ることでもえてくる世界 ミネルヴァ書房.
- 伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田新・野田航・辻井正次(2014). 肯定的・否定的養育行動尺度の開発: 因子構造および構成概念妥当性の検証 発達心理学研究, **25**, 221-231.

- 伊藤啓介・大隈絏子・温泉美雪・神内咲子・福田恭介・免田 賢・山上敏子(1998). 山上敏子(監修) 発達障害児を育てる人のための親訓練プログラム—お母さんの学習室 二瓶社.
- 岩坂英巳・清水千弘・飯田順三・川端洋子・近池 操・大西貴子・岸本年史(2002). 注意欠陥/多動性障害(AD/HD)児の親訓練プログラムとその効果について 児童青年精神医学とその近接領域, **43**, 483-497.
- Kamio, Y., Inada, N., Moriwaki, A., Kuroda, M., Koyama, T., Tsujii, H., Kawakubo, Y., Kuwabara, H., Tsuchiya, K. J., Uno, Y., & Constantino, J. N. (2012). Quantitative autistic traits ascertained in a national survey of 22529 Japanese schoolchildren. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, **128**, 45-53.
- 上林靖子・中田洋二郎・藤井和子・井潤知美・北 道子(2002). 読んで学べる ADHD のペアレントトレーニング—むずかしい子にやさしい子育て シンシア・ウィットナム(著) 明石書店.
- 上林靖子・北 道子・河内美恵・藤井和子(2009). 上林靖子(監修) こうすればうまくいく発達障害のペアレント・トレーニング実践マニュアル 中央法規出版.
- Lovaas, O. I., Koegel, R. L., & Schreibman, L. (1979). Stimulus over selectivity in autism: A review of research. *Psychological Bulletin*, **86**, 1236-1254.
- Lundahl, B., Risser, H. J., & Lovejoy, M. C. (2006). A meta-analysis of parent training: Moderators and follow-up effects. *Clinical psychology review*, **26**, 86-104.
- 松本拓真(2015). 自閉症スペクトラム障害の子どもの受身性が固定化する一機序—親子の相互作用と親にもたらす苦悩 発達心理学研究, **26**, 186-196.
- Matsuo, R., Inoue, M., & Maegaki, Y. (2015). A comparative evaluation of parent training for parents of adolescents with developmental disorders. *Yonago Acta Medica*, **58**, 109-114.
- Mayes, S. D., Calhoun, S. L., Murray, M. J., & Zahid, J. (2011). Variables associated with anxiety and depression in children with Autism. *Journal of Developmental and Physical Disabilities*, **23**, 325-337.
- 免田 賢・伊藤啓介・大隈絏子・中野俊明・陣内咲子・温泉美雪・福田恭介・山上敏子(1995). 精神遅滞児の親訓練プログラムの開発とその効果に関する研究 行動療法研究, **21**, 25-38.
- 免田 賢・藤原直子(2017). 思春期の発達障害に対するペアレントトレーニングプログラムの開発に向けて: 文献的考察 吉備国際大学心理・発達総合研究センター紀要, **3**, 19-27.
- O'Dell, S. L., Tarler-Benlolo, L. A., & Flynn, J. M. (1979). An instrument to measure knowledge of behavioral principles as applied to children. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **10**, 29-34.
- PNPS 開発チーム(編). (2018). 肯定的・否定的養育行動尺度マニュアル 金子書房.
- Schaefer, C., & Briemeister, J. M. (1989). *Handbook of parenting- Parents as co-therapists for children's behavior problems*. Wiley, pp. xii-xiv(山上敏子, 大隈絏子監訳(1996). 共同治療者としての親訓練ハンドブック 二瓶社, pp. xii-xiv.).
- 富澤弥生・佐藤利憲・横山浩之(2013). 高機能広汎性発達障害へのペアレントトレーニングおよび注意欠如/多動性障害の併存診断の有用性についての考察 脳と発達, **45**, 33-37.
- Williams, L. R., Degnan, K. A., Perez-Edgar, K. E., Henderson, H. A., Rubin, K. H., Pine, D. S., Steinberg, L., & Fox, N. A. (2009). Impact of behavioral inhibition and parenting style on internalizing and externalizing problems from early childhood through adolescence. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **37**, 1063-1075.
- 吉田遙菜・野中俊介・堀川 柚・加藤海咲・嶋田洋徳(2019). ペアレントトレーニングにおける親子の認知行動的特徴に応じたアセスメントと介入方法の検討 早稲田大学臨床心理学研究, **19**, 169-178.

(受稿:2021.8.30;受理:2022.1.8)